



紀平真理子のオランダ通信

第34回

イノベーションを続ける World Potato City Emmeloord

北東ポルダー基礎自治体は洪水のリスク対策のために作られたゾイデル海に大堤防を架け、客土をしてできた干拓地で1940年代にオランダ各地からの移住が始まった。World Potato Cityというコンセプトを作った元政治家であり、Nagele（ナーヘレ：域内の村のひとつ）のジャガイモ生産者でもある Willem Keur 氏は1958年にオランダ南部より両親とともに移住した。同氏への取材をもとにレポートする。

「もともと住んでいた場所に港を作るため移住を余儀なくされて引っ越した。当初は何もなく泣いたよ。でもいまはラッキーだったと思っている」

世界のジャガイモ産業をステアリング

北東ポルダーはエメロルト市を中心として円形状に10村が同間隔で広がっている。現在、同自治体には育種会社などの関連会社や検疫機関、さまざまなレベルの教育機関があり、6,902haで種イモ、2,857haで生食用ジャガイモを栽培している。このプロジェクト

は2014年に草案を作成し、15年から正式に「World Potato City エメロルト」を打ち出した。この名前は瞬く間に浸透し、毎年世界50カ国以上から関係者が訪問しているという。

World Potato City はもともと土壌の質が良いことと、オランダ各地の生産者が集まったため幅広い知識

があったことから、同氏と農産物貯蔵システム会社 Tolsma 社の Harry 氏により「自治体内の知識や経験をつなげて、世界中に発信していき、また集まってくるような仕組みをつくり、北東ポルダーは縁の下力持ちとして世界のジャガイモ産業をステアリングする



関係会社入り口に掲げているロゴ

プロフィール

1985年、愛知県名古屋生まれ。南山大学外国語学部スペイン語学卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてに実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。



Willem氏とKEUR-FARMを継いだご子息のThomas氏。World Potato City Emmeloordの自家用宣伝カーとともに

ことを目的」として進められた。インドや中国の近年のジャガイモ産業の発展にも同自治体は大きく関与しているようだ。また、自治体長 Aucke van de Werff 氏によれば「生産者が知識を持っていることを自覚し、自分の仕事に誇りを持つことにも大いに役立った」

Agrofood クラスター

World Potato City は Agrofood クラスターの傘下にある。同クラスターはイノベーション（市場・雇用創出）、知識（教育とビジネスのギャップを埋める教育）、ビジネス（関連企業の誘致や自治体・オランダ・ヨーロッパレベルでの推進）の3本柱で、国内・国際レベルでのコラボレーションと若者をひきつけることを目的としている。歴史的にこの地域は住民の出身地が異なるため、違いを話し合っただけで協力し合う気質があり、「生産者や民間企業、政府組織などすべてのジャガイモ関係者が会費を支払い参加している」とのこと。メンバーは国内外の訪問者へのトレーニングや生産者訪問受け入れなども行なっている。筆者が昨年参加した民間と行政が一緒に行なう Potato Business School もこれらの一環だ。

「10年後どうなっているかわからないが、北東ポルダーの変化がすごく楽しみだ。そのためには業界全体で協力し合うこと、イノベーションに挑戦し続けることは不可欠だね」